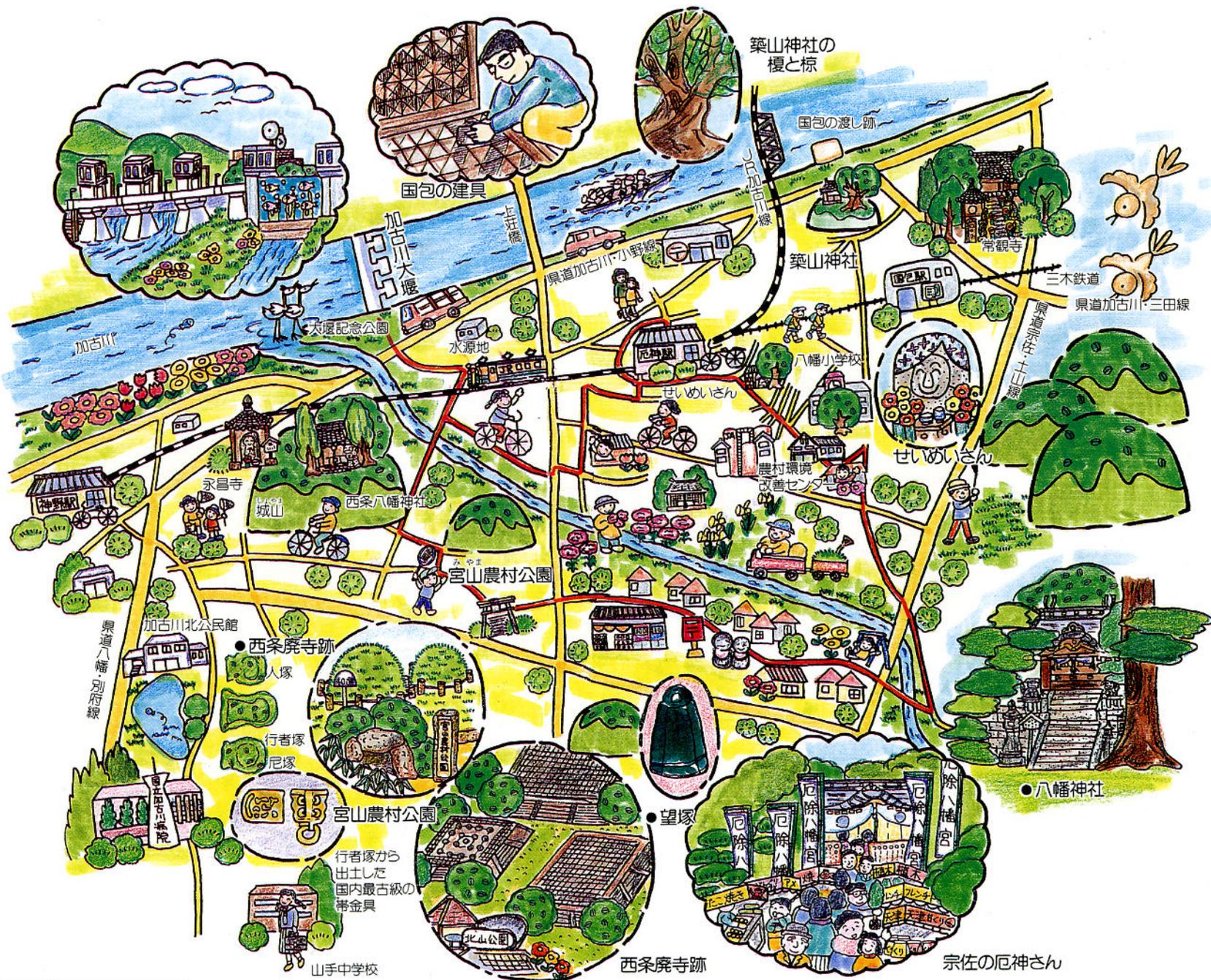


望理の里 散策



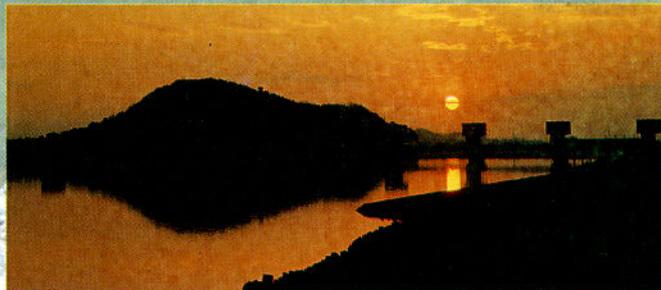
わがまち加古川40選を歩いてまわるおすすめコース。
 広々とした田園風景のこの地域の丘陵にはたくさんのお古墳があります。加古川に住んでいた古代人に思いをよせながらの「望理の里歴史散策コース」。
 加古川再発見に、さあ出発！

コース
 所要時間2時間11分
 8.7km

(JR加古川線) 厄神駅	2.4km 36分	大堰記念公園	1.5km 23分	宮山農村公園	2.4km 36分	八幡神社 (宗佐の厄神さん)	2.4km 36分	(JR加古川線) 厄神駅
-----------------	--------------	--------	--------------	--------	--------------	-------------------	--------------	-----------------

望理の里 散策

この地域は、奈良時代の播磨風土記によると、景行天皇が播磨地方を巡行した際に、加古川の流が大きく曲がりくねって、その間に平野が広がっている様を見て感激され、「この川の曲がり具合は、はなはだ美しい。」と仰って以来、人々は、“望理の里”と呼ぶようになったそうです。



加古川大堰

加古川は県下最大の川で、8市17町をうるおしています。大堰は、加古川本流の左岸八幡町から右岸上荘町に渡っています。長さ422.5m、治水と水需要に対処するため、建設省が9年間の歳月と400億円を投じて、平成元年3月に完成しました。大堰上流の水面を利用した各種行事が開催されています。西条の城山(じょうやま)を背にした公園には緑の風が流れます。



西条廃寺跡

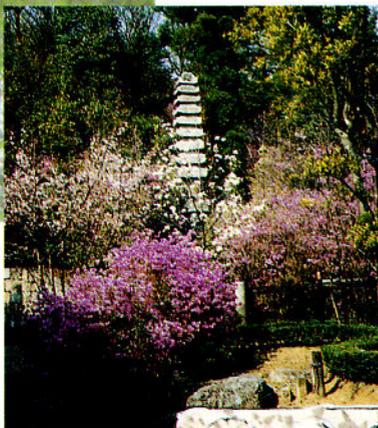
奈良時代前期(7世紀後半)の寺院跡です。法隆寺式伽藍をもつ市内最古の寺院跡で、塔・金堂・講堂のいずれもが、基礎を瓦積基壇でもって化粧されています。出土遺物には、塔の相輪に使われていた九輪・風鐸があり、加古川総合文化センター博物館で復原展示されています。この様に廃寺跡は、南方は印南野平野が一望でき、周囲を古墳群に取り囲まれた中に、寺院が建てられていたものであろうと思われます。

清麻呂といのしし

今から1200年ほど前、奈良の都に道鏡という名高い坊さんがいました。天皇にお仕えて、わずかの間に太政大臣禅師になり、自分の思うままに政治をしていました。ちょうどそのころ、「道鏡を天皇の位につかせたら、天下は太平になるであろう。これは、宇佐八幡のお告げである。」と九州の太宰府の神主が、朝廷に申し出ました。宇佐八幡のお告げは、これまで何度も朝廷の政治を動かしているのだから、たいへんな知らせでした。道鏡を天皇の位につけるといふのは、たいへんなことですから、神様のお告げをもういちど確かめるために、天皇は宇佐八幡へ使者(和氣清麻呂)をやることにし

ました。道鏡は、清麻呂のところへ何度も使いをやり自分に都合のよいお告げを持ち帰るよう、頼んだりおどしたりしましたが、学問にすぐれた信仰心の深い清麻呂は、とりあわないで出発しました。都を出て、播磨の国「野村」までやってきました。さびしい山の本は、ごうごうと鳴っていました。「まてっつ」急ぎ足の清麻呂の前に、刀をひさげた男たちがバタバタと出てきました。清麻呂を殺す為に道鏡がさしむけた悪者です。清麻呂は、しまったと思いました。にわかに空がまっくろになり、ガラガラと雷が鳴ると、山の中からバツと大きないのしが現れものすごい勢いで男たちにおそいかかりました。そして、

悪者は、つぎつぎと倒れてしまいました。いのししに助けられた清麻呂は、1ヶ月の長い旅ののち、宇佐八幡の神前にぬかずき一心にお祈りして、神様のお告げを聞きました。「道鏡のような皇族でない者を、天皇の位につけてはならない。無道のもの早く取り除きなさい。」このお告げを、都に帰って天皇に申し上げました。道鏡は、天皇の位につくことはできませんでした。「八幡の厄神さん」とか「宗佐の厄神さん」とかいわれている八幡神社は、このいわれから厄除けの神様として名高いのです。



日光山 常楽寺

播磨地方は、古くから全国的にも有名な竜山の産地であり、豊富な石材を利用して多くの石棺が作られていました。鎌倉時代から室町時代にかけて、石棺の蓋などの表面に仏像を刻んだ石棺仏は、全国で8割が加古川市と加西市に集中しています。



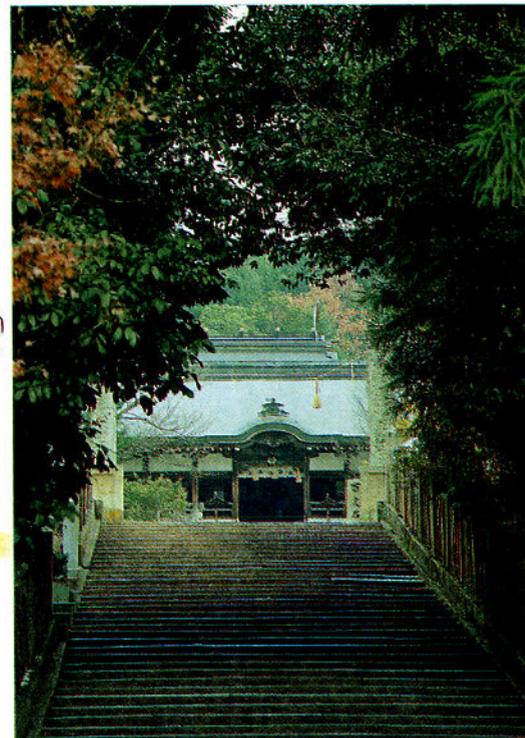
行者塚古墳

古墳時代中期のものと考えられる行者古墳で3~4世紀の中国製とみられる龍の模様を透かし彫りにした国内最古級の金銅製の帯金具などが出土されています。



八幡神社 宗佐の厄神さん

2月18・19日の厄除大祭には、全国から参拝者が訪れ、沿道は人と露店であふめつされます。また、植木市も催されます。



国包の建具

国包建具の発祥は、1825年頃といわれています。加古川を利用した丹波杉原地方からの木材の集散地であった国包に、木工業がめばえ、農業用の唐箕作りから建具作りへと移行してきたものです。独特のデザインと緻密な手工芸の技は、全国的に有名で、日本一の木工の里“飛騨の高山”に例えて“西の高山”ともよばれています。

